

令和7年度インクルーシブな学校運営モデル事業 取組概要

<p>目的・目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 交流及び共同学習の「共同学習の側面」を発展させ、すべての児童生徒が共に学び合う環境を整備する。 ● 柔軟な教育課程と指導体制を構築し、インクルーシブな学校運営を実現する。
--------------	--

<p>学校運営連携校</p> <p>宮崎県立小林こすもす支援学校(知肢併置) 小林市立東方小学校 小林市立東方中学校 宮崎県立小林高等学校</p>	<p>併設型</p>	<p>カリキュラム・マネージャー</p>	<p>元特別支援学校指導教諭(音楽) 特別支援教育の実践と研究に豊富な経験を持つ</p>
--	------------	----------------------	---

事業1年次の取組概要、成果・課題

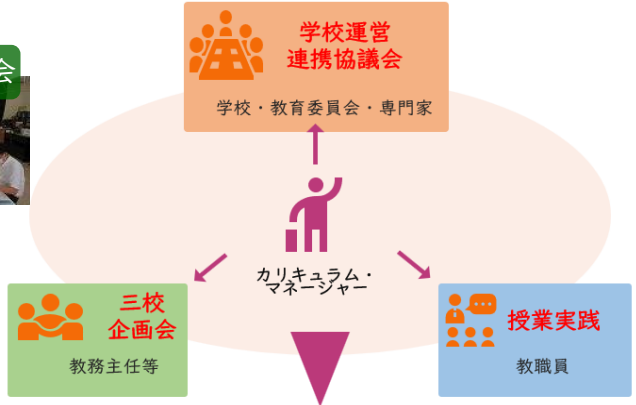
小林こすもす支援学校は、東方小・中学校及び小林高校の敷地内に各学部を設置している。この立地的な優位性を生かし、既に多くの交流が定着し、連携を進めるための4校の各種会議等もシステム化されている。事業開始後は、既存の交流及び共同学習がブラッシュアップされ、特にそれぞれの教科等のねらいを達成する共同学習の側面に係る授業実践が多く行われたことが成果の一つに挙げられる。課題としては、事業終了後を見据えて持続可能な自走できる仕組みづくりとして業務負担の軽減と効率化を図るための各種ツールの開発及び活用が挙げられる。

取組概要(事業2年次)

既存のコミスクと一体的に運営する「インクル・コミスク」についての協議



三校企画会における調整により実現



事業の柱組み(三つの柱)
 インクルーシブな学校運営モデルの実現



それぞれの教科等のねらいを達成する共同学習



①交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

○小学校3年 理科「ものの重さ」× 小学部3年生活単元学習「おもさをはかろう・かたちをつくろう」

- ・授業シートの活用
 - 異なる教育課程の目標を可視化、校種を超えて学びの質を保証
- ・検証授業後の小学校・中学校・支援学校による合同事後研修会の実施

アンケート 小学生「協力して実験した」 小学部生「粘土の形が楽しかった」
 教員「授業シートにより、目標を共有することができた」



小学校 理科 × 小学部 生活単元学習

○高校 × 高等部 音楽「トガトンを使って」

- ・「単元の構造化」の導入
 - 同じ題材を扱いつつも「一緒に学ぶ場面」と「別々に学ぶ場面」を計画的に分け、それぞれの学びを高める時間と共同学習の質を高める時間を両立

アンケート 高校生「きれいな響きに聞こえた、みんなできてよかった」
 高等部生「トガトンのリズムがみんな違って、すごくいい響きだった」



高校×高等部 音楽

②現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

○検証授業におけるチーム・ティーチング及び乗り入れ授業

- ①小学校の校内研究の一環である一人一授業を全て共同学習で実施
 - 1年 生活科「夏がやってきた」× 小学部1年 生活単元学習「夏を楽しもう」
 - 2年 図工「手の形、ローラーアート」× 小学部2年 図工「みんなの手で旗を作ろう」
 - 3年 理科「ものの重さ」× 小学部3年 生活単元学習「おもさをはかろう・かたちをつくろう」
 - 4年 図工 × 小学部4年 図工「絵の具でゆめもよう」
 - 5年 図工 × 小学部5年 図工「形に命を吹き込んで」
 - 6年 家庭科「夏を涼しくさわやかに」× 小学部6年 生活単元学習「手洗い洗濯をしてみよう」



チーム・ティーチング

- ② 中学部職員による運動会の事前学習実施
- ③ 高校の体育科教員による指導



乗り入れ授業

○三校企画会や三校合同教育課程編成会議における協議

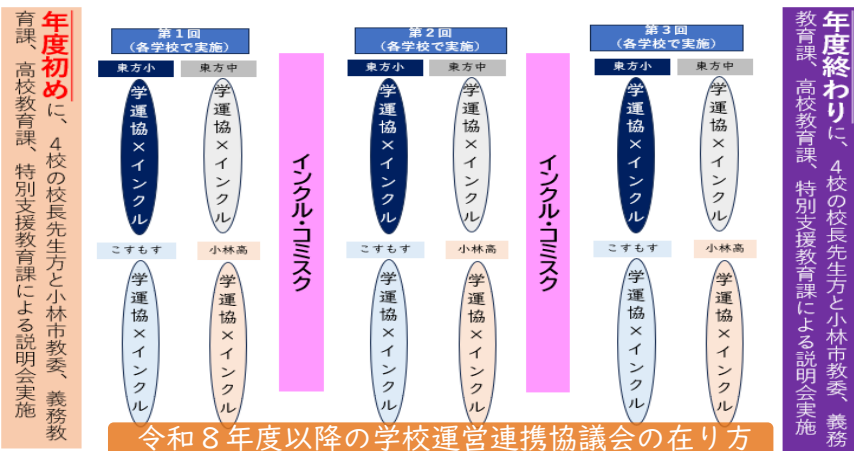


本事業の成果(事業2年次)

- ・共同学習の実践の蓄積と質の向上
- ・チェックリストの導入によるデータに基づいた本事業の実行度評価
- ・学校運営連携協議会と学校運営協議会の発展的結合→インクル・コムスク
- ・共に学ぶ仲間としての意識醸成、教師の指導技術の相互補完

アンケート
 小学生「どうやったら伝わるかなって、一生懸命考えた。言葉だけでなく、ジェスチャーを使ったらわかってくれてうれしかった」
 小学生「交流というより、一緒に働く仲間、という感じがした」(生活科「おもちゃまつり」にて)
 教員「支援学校の先生のプロセスを細分化して教える姿を見て、自分の授業のユニバーサルデザイン化に役立った」

(案) インクル・コムスクでつながる4校の学校運営協議会



前年度からの変化・改善点

・学校間をつなぐハード(会議体・制度)と、共同学習の質の向上を図るソフト(各種ツール、共同学習における手法等)の土台が完成

課題

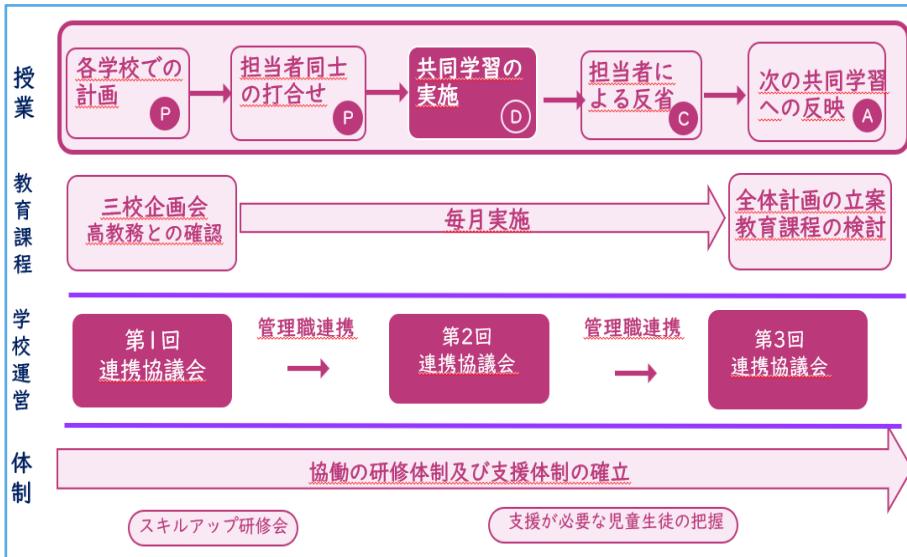
- ・学校ごとの構造的課題(教科担任制等)
- ・業務負担の軽減と効率化
- ・専門性(教科のねらいや評価の視点)の可視化の深化
- ・地域への理解促進と地域全体で支える仕組みづくり

今後の展望

- ・授業時数や単元数を絞り、構造的な生約の中でも質の高い共同学習の実現
- ・ICTツールの活用、授業シート等のコンパクト化
- ・成果報告会の実施
- ・人に依存しない組織として自走できる仕組み
→持続可能なインクルーシブ教育システムの構築

課題

今後の展望



事業終了後の自走を見据えたPDCAサイクル